

第18回全国大会

(2018年11月17日(土)、於 日本女子大学 目白キャンパス)

要 旨

I 研究発表

第一室

1. 革命という喩法——*Felix Holt, the Radical*における表象／代表の声とその揺らぎ

塚越 幸祐 (東京大学大学院)

George Eliot の *Felix Holt, the Radical* (1866) は、物語の展開から推測できるような作者の政治的態度とは裏腹に、その事実だけでは解釈しきれない曖昧な言語性＝レトリックを有したテキストである。本発表ではプロットや伝記的解釈に抵抗する逸脱的な言語性を J. L. オースティンの「行為遂行性」概念と結びつけ、作品の意図せぬ「革命」への志向性を考察した。それによって明らかになったのは、エリオットが付録的に1868年に書き足した漸進主義を旨とする‘Address to Working Men’という演説風エッセイが、上で述べたような(誤)読可能性を抑圧し、テキストのパフォーマティヴな言語性を隠蔽するたぐいのテキストであるということであった。そして、そうした後書き的なテキストの修正／改竄が結果的に、彼女の根本的な倫理的命題である『フィーリクス・ホルト』のリアリズムの「表象／代表」を不可能にしてしまう、というテキスト的なジレンマの存在を結論として提示した。

2. Thomas Hardy, *Our Exploits at West Poley* の雑誌掲載保留をめぐる

清宮 協子 (国士舘大学(兼))

1883年、Thomas Hardy はアメリカの少年少女向け週刊雑誌 *The Youth's Companion* (以下 *Companion* と略記) の注文に応じて、*Our Exploits at West*

Poley (以下 *Exploits* と略記) を執筆したが、この小説は結局同誌には掲載されなかった。本発表は、Hardy の少年小説が却下された理由を、同時期に *Companion* に寄稿していた Mark Twain の *Tom Sawyer* (1876) との比較、Hardy の後期大作との比較を通して推測し、今まで光を当てられずにいた Hardy の少年文学観を明らかにするものである。両作品は、登場人物、設定、プロットに類似点があるが、作品における作者の視点は正反対であり、*Tom Sawyer* では大人が批判対象となっているが、*Exploits* では、大人が子どもたちを導いている。その代表格である「失敗者」に注目すると、Hardy の後期大作に見られる失敗者との類似点があり、彼にモラルを語らせることで「モラルは成功者の側にはない」という彼の信念を一貫させていることが分かる。しかしながら、それは一般的な少年向き小説には不適切であったため掲載を見送られたと分析した。

3. “Beautiful Adaptations Everywhere”: Charles Darwin’s *On the Origin of Species* and Thomas Hardy’s Poetic Adaptations

Neil Addison (日本女子大学)

In 1924 Thomas Hardy wrote a letter to the scholar Ernest Brennecke in which he claimed that, along with the influence of “Huxley, Spencer, Comte, Hume, Mill”, his “pages show harmony of view with Darwin” (Purdy and Millgate 259). Hardy was a great admirer of Charles Darwin’s work and, according to his autobiographical *The Life*, was “among the earliest acclaimers of *The Origin of Species*” (198). *The Origin* is balanced in its representations of nature, the cruel “struggle for life” mitigated, as Darwin wrote, by “beautiful adaptations everywhere, and in every part of the organic world” (115). For Darwin, nature arbitrarily produced beauty while engaged in ceaseless natural competition that provided both winners and losers. Examples of such random vitality can also be found in many of Hardy’s poems such as “I Watched a Blackbird” where the beauty of the creature’s “crocus-coloured bill” juxtaposes its transient “building scheme” (827). Further, while Hardy’s

world is representative of Darwinian competition, it is also indicative of the ways in which certain creatures are shown to thrive in Darwin's system. Hardy's rural subjects, for example, such as an old horse, a ploughman and a pair of lovers in "In Time of 'The Breaking of Nations'", often exemplify survival and vitality, so that "war's annals will cloud into night / Ere their story die" (511). Hardy's poetic adaptation of evolutionary theory can thus be viewed in a balanced, pessimistic and optimistic light which reflects the nature of Darwin's writings. This study therefore discusses the ways in which plants, animals and humans can be seen to endure and succeed in Hardy's poetry, and how this can be traced to the work of Charles Darwin.

第二室

1. 仮装としての「日本」——世紀転換期の舞台芸術における「キモノ」の利用

山口 有梨沙 (筑波大学大学院)

1860年代よりイギリスに登場した日本の着物は、1890年代には西洋人向けに製作された「キモノ」となって売買されるようになる。その過程で「キモノ」は中上流階級の女性たちが室内で着るティーガウンとして着用され、イギリス社会やファッション、女性の身体感覚に合わせて修正され、形を変化させてきた。1885年1月ナイツブリッジにロンドン日本人村が開業し、3か月後に *The Mikado* が開演する。舞台芸術や仮装パーティで着用されたキモノにもイギリス側からの「修正」がみられる。これまでの研究ではファッションに影響を与えた「キモノ」の研究は散見されるが、当時大流行した *The Mikado* をはじめとする舞台芸術や仮装パーティで着用された衣装としてのキモノに焦点をあてた研究はない。そこで本発表は、現存する「キモノ」の実地調査と写真や記事等の分析を通して文化接触ないしは文化翻訳の媒体として修正されたキモノが、世紀転換期イギリスの身体文化やジェンダー感に複雑に織り込まれている様を詳らかにした。

2. The Pre-Raphaelite Symbols in A. C. Swinburne's *Tristram of Lyonesse* Ayvazyan Lilith (慶應義塾大学大学院)

Algernon Charles Swinburne (1837-1909), a Pre-Raphaelite poet, showed great interest in the Arthurian cycle. In his poems, he touched upon several of the topics discussed in Sir Thomas Malory's *Le Morte d'Arthur* (1485). It would not be an overstatement to say that the chef-d'oeuvre of his life was the poem *Tristram of Lyonesse* (1882). Written after both Tennyson and Arnold, Swinburne's *Tristram of Lyonesse*, not surprisingly, has a contradicting position towards both of these poems.

What makes the epic piece stand out in the parade of countless poems on Arthurian topics, is not only Swinburne's wide range of knowledge in mediaeval matters, but the unique and distinct Pre-Raphaelite symbolism manifested through author's marvellous poetic language. Themes and naturalistic visions of the author are orchestrated through the means of parallelism and contrast. The majority of Swinburne's comparisons and parallels are drawn with jewels, colours and flowers, such as 'bloody-bright ruby', 'amber-coloured sphere' or 'rose-red sign'. My study centres on identifying such symbols in the Pre-Raphaelite paintings (Dante Gabriel Rossetti, Edward Burne-Jones, John William Waterhouse, etc.) as well as poetry, which inspired Swinburne.

The primary sources for this paper include Swinburne's poem itself, the paintings of the aforementioned authors, pieces of poetry by Dante Gabriel Rossetti and Christina Rossetti, as well as the correspondence of Swinburne with his fellows. My analysis aims at gaining a deeper understanding of the remarkable Pre-Raphaelite symbolism, as well as the insights and prospects which Swinburne sought to convey through his *Tristram of Lyonesse*.

3. リー・ハントと詩のcockney派——ジョン・キーツ批判の背景

江澤 美月 (一橋大学(兼))

本発表では、詩人ジョン・キーツ批判の背景として、彼を文壇に紹介し、彼と共に『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』により「詩のcockney派」と批判された『エグザミナー』の編集者リー・ハントの報道活動への批判があることを考察した。キーツの伝記を上梓したりチャード・モンクトン・ミルズは、ハントが批判していたトーリ党の流れを汲む保守党の議員であり、彼は「詩のcockney派」のフランス革命への共感に注目している。このことを契機に本発表ではイギリスにおける二つのフランス革命観の対立を詳らかにし、民衆の立場に立ったハントによるキーツの詩の解釈は、当時の政権与党、トーリ党のフランス革命観と対立したこと、ミルズは伝記でキーツに対するハントの影響を否定することでキーツの再評価と同時にハントの間断なき政権批判を掘り崩していることを考察した。

II シンポジウム

「移民への錯綜する眼差し——排除と寛容のはざままで」

司会：田中 孝信 (大阪市立大学)

そもそもイギリスは、自らを民族的に多数派と考える人々も大陸からやって来た人々に起源を持つ移民の国。その多数派が新たな移民を「他者」として人種主義と外国人嫌悪をもって排斥してきたのである。ヴィクトリア朝もそうだ。大飢饉によるアイルランド人やポグロムによる東欧ユダヤ人の大規模な流入、さらにはイギリス帝国の版図の拡大による有色人種の到来には、敵意と偏見が向けられた。その一方でカトリック解放法やユダヤ人解放法のように「よそ者」を取り込もうとする動きが見られたのも事実である。今回のシンポジウムでは、そうした排除と寛容がどのように機能し、移民は社会に対してどうした反応を示したのかを、アイデンティティやイングリッシュネスの問題と絡めて探ってみた。

ユグノーと英国織物産業——デザインにおけるイングリッシュネスの模索

パネリスト：閑田 朋子（日本大学）

ユグノーは、産業・科学・芸術面などで優れた技術をイングランドにもたらしたため、「有益な移民」「理想的移民」「最も成功した移民」として語られがちではあるが、当初は忌み嫌われもすれば、その成功は妬みと反感の対象ともなった。本報告はこのような両義的な視線が、ユグノーが社会に同化する過程を経て同情的に変化する様子を大きく概観した。そして同時に、より具体的にはジャーナリスト、イライザ・ミーティヤードが1846年に発表した短編「スピタルフィールズの技巧」に焦点を絞り、この小説を手掛かりとして、異能集団とも呼べるユグノーを、イングランドが産業を介してとりこもうとするスタンスについて考察を行った。なお本作は、かつて最先端であったユグノーの絹織物の技術とデザインが時代遅れになった19世紀ロンドンを舞台として、織物産業衰退にあえぐユグノーの子孫を^{いち}一イングランド女性が導いて、イングランド全体の織物産業のデザイン発展の鍵とするものである。

アイルランド人移民——複眼的・長期的視点から

パネリスト：勝田 俊輔（東京大学）

19世紀に大量のアイルランド人移民がブリテンに到来したことはよく知られており、研究の蓄積もある。だが彼らに関するイメージとしては、カトリックかつケルトで貧しいアイルランド人と各地のホスト社会との間で種々の軋轢が生じた、という単純化された定形が再生産される傾向も強い。本報告では、第一に、19世紀ブリテンにおけるアイルランド系の持った多様性・多層性（プロテスタント・中産階級・社会的上昇の例は少なくない）を検討した。第二に、ロンドンにおいては、カトリックとされるアイルランド系は、むしろ移民した後に教会の統制の下で「カトリック」としての信仰を獲得した点を確認した。第三に、19世紀末のイースト・エンドの港湾地区におけるアイルランド系労働者について、熟練労働者が多かったこ

と、そして労働争議における非熟練労働者との共闘に際しては、状況に応じた柔軟な姿勢を見せていたことを解明した。

イースト・エンドとイースト・サイド——ユダヤ移民の世界

パネリスト：堀 邦維（日本大学）

19世紀末にロシア・東欧から英米両国に大量のユダヤ移民が流入する。それを促したのは旧大陸における経済的困窮とポグロムというユダヤ人迫害であった。彼らの多くは英国ロンドンではイースト・エンド、米国ニューヨークではロウアー・イースト・サイドに集住しゲットーを形成する。とくにイースト・エンドのユダヤ人はその貧困の度合いが著しく、そのありようは、イズラエル・ザングウィルの『ゲットーの子どもたち』（1892）に活写されている。そこにはゲットーのユダヤ人と英国化した富裕ユダヤ人との対象が鮮明に描かれるのだが、目を引くのは、文章中に散見するイディッシュ語である。英語の中にユダヤ人特有の（英国人には理解不能な）言語を混入させることによって、同化よりも民族的主張を行おうとするザングウィルの姿勢が伺える。これは、ナショナリズムの興隆という時代の趨勢とも呼応するが、その潮流の一つでもあったシオニズムに彼が関わったのは当然であった。この作品は現代ユダヤ文学の雛形となり、彼に続いた米国ユダヤ系作家の模範となった。その一方で、ザングウィルは現在の多文化主義への方向性を指し示していたと言えるかもしれない。

チャイナタウンを物語る——「オリエンタルなロンドン」の誘惑

パネリスト：田中 孝信

19世紀後半にイースト・エンドに住み着いた中国人は、チャイナタウンを形成する。その規模は小さいものだったにもかかわらず、阿片戦争以来の罪悪感ゆえに、逆侵略の恐怖に怯えるイギリス人は、「黄色の脅威」と相まって中国人を墮落をもたらすものと見なした。特に問題とされたのが

白人女性との異人種間混淆だった。しかし同時に、両者の関係を肯定的に捉える見方も出てくる。トマス・バークの短編集『ライムハウスの夜』(1916)中の「中国人と子ども」はその点で殊に有名だ。だが短編集の他の多くの物語には中国人男性と白人女性間の憎しみや復讐をも含めた様々な感情が描き込まれているのだ。では、それは何を意味するのだろうか。その理由を探るには、出版時期が第一次世界大戦のさなかだったという点に着目しなければならない。当局の市民生活への締めつけが厳しさを増すなか、バークはかつての法の支配が及ばなかった、周縁の多文化的で非営利的な夜の生活に反ブルジョア的な喜びを見出し、物語のなかにロマンティックに魅らせようとしたのである。結果として現出した空間は、異なる人種同士が時には親密に、時には反目しながら、問題を抱えながら共生する姿と言えよう。それは帝国の人間関係の本質を表すものであり、時の経過と共に白人社会全体が模索せざるを得ない共存のための道標なのである。

III ラウンドテーブル

「女性のプラットフォームを求めて——女性参政権獲得の歩み」

司会：市川 千恵子 (茨城大学)

「1918年国民代表法」の制定によって30歳以上の女性に参政権が与えられた。年齢と財産条項の制約がつけられたが、この1918年の成果は1830年代からの長きにわたる闘いの結晶でもある。このラウンドテーブルでは、19世紀の女性の政治参加への意識の目覚めから実現に至るまでを検証した。まず、1830年代からの参政権運動の歩みと、女性たちのネットワーク形成の様相について時系列に概観した後、山口氏が19世紀後半の高等教育やチャリティを介したミドルクラスの女性の参政権問題への関心を、次に佐藤氏が女性芸術家や女優参政権同盟に参加した女優たちなどの職をもった女性たちの参政権運動への関与を検証し、私的・公的、あるいは保守派・急進派の定義の曖昧性までも再考する機会となった。

参政権意識の芽ばえ——「保守的」な女性たちの目覚め

提題者：山口 みどり（大東文化大学）

ヴィクトリア期の人気少女小説家シャーロット・ヤングは、創刊した国教会信徒向け少女雑誌『マンスリー・パケット』誌を基盤に、19世紀後半のイギリスに教育、メディア、チャリティにまたがる女性のための「プラットフォーム」を築いた人物だといえる。しかしその女性観は極めて保守的で、女性参政権には反対の立場を取っていた。ところが同誌が1891年に行った女性参政権を巡る誌上論争では、ヤングらの予想に反し、この時期にしてすでに論争参加者の大半が女性参政権を支持していたのだ。誌上の議論からは、牧師の家庭など保守的な環境で育ったヤングの信奉者たちが、貧者に対する慈善活動に力を尽くし、あるいは友愛協会等の大規模チャリティの運営に関わった実体験から、女性の能力への「自信」と社会の現状への「怒り」に目覚めていたことが読み取れる。そこでは、ヤングの女性観に沿った利他的な活動の延長として、女性参政権の必要性が展開されていた。

女性参政権運動を支えた社会主義者のネットワーク

提題者：佐藤 繭香（麗澤大学）

20世紀初めの女性参政権運動は、エメリン・パンクハースト夫人に率いられた女性社会政治同盟(WSPU)の戦闘的な活動がよく知られている。しかし、女性参政権運動には、これ以外の異なる特徴を持った女性参政権組織が複数存在し、組織の垣根を超えた協力関係を含め、実に多元的でありながら、ひとつの大きな社会運動を形成していた。では、何が女性たちを連帯させていたのか。その連帯の一つの可能性として社会主義、そしてその社会主義を根底にしたネットワークがあった。特に女優参政権同盟や芸術家参政権同盟に集った女優やアーツ・アンド・クラフツ運動にも関わる芸術家たちにその傾向が見られる。ヴィクトリア朝後期に、バーナード・ショーをはじめとした男性のフェビアン社会主義者たちを巻き込み形成された女性たちのネットワークが、20世紀に入り女性参政権運動のネットワー

ク、組織づくりの基盤となった。

IV 特別講演

プーター氏の悲哀

—— ヴィクトリア朝におけるロウワー・ミドル・クラスの表象

新井 潤美 (上智大学)

チャールズ・プーターとはジョージ・グロウスマスのユーモア小説 *The Diary of a Nobody* (1892) の主人公である。ロンドンの郊外在住の事務員で、Pooterish という形容詞まで生み出した「愛すべきロウワー・ミドル・クラス」であり、その「日記」は今も愛読されている。一方で、このような新しいロウワー・ミドル・クラスはその急激な増加によって、脅威とみなされていた。例えば自分自身が郊外のロウワー・ミドル・クラス出身の H. G. Wells は郊外住民を『宇宙戦争』で近親憎悪的に攻撃した。また、Jerome K. Jerome の人気作品 *Three Men in a Boat* (1889) は、出版当時は批評家から、その「ロウワー・ミドル・クラスの文体」が非難された。現在のロウワー・ミドル・クラスはイギリス社会ではもはや周縁的な存在ではないが、ヴィクトリア朝以降の文学作品における彼らの表象の伝統と影響は根強く残っている。「ロウワー・ミドル・クラス」はその実体とは別に、19世紀からのイメージを保ち続ける存在なのである。